

A 6 女子短大生の家族関係——父子関係を中心として——

桜美林短大 ○広橋比乃美
上野学園短大 遠山千代子

【目的】父親不在、父権喪失などといわれて久しい。女性就労の増加に伴い、家庭における父親の役割が問われている今日である。そのような背景の中で、本研究では、重要であるとされる初期の親子関係を経ている女子短大生を調査することにより、その親子関係、特に父子関係の一端を探る。同時に両親にも調査をし、発達過程での父親の関わり方と現在の父子関係をみることにし、その規定要因を探る。

【方法】対象—東京都内短大2年生193名、埼玉県内短大1年生100名、計293名とその両親。
方法—短大生については自記式質問紙法により調査。両親については、学生に配布し後日回収。時期—1991年6月中旬～下旬

【結果】この時期の親子関係は、父子の関わりは母子より少ない。しかし、父への好意(好き嫌い)、対話の度合をみると、52%が好きという気持ちをもっており、対話も74%がもっており中でも22%がとてよく話していた。対話の度合は、小学生時期は高く、思春期反抗期である中学生時期は低くなり、高校、短大時期と年齢とともにまた高くなっていった。

現在の父子関係の規定要因として、幼児期からの育児・教育への参加の量あげられた。特に、小学生の時期の父子の関わりが多いと、成長してからの対話が多くなり、父に対する評価、父への好意も良くなると思われる。